

主権者としての 政治参加の意義について考えよう

杉並区立東原中学校 菊地祐太

1 はじめに

政治参加について、学習指導要領では、「議会制民主主義の意義について考えさせるとともに、多数決の原理とその運用の在り方について理解を深めさせる。(中略) 民主政治の推進と、公正な世論の形成や国民の政治参加との関連について考えさせる。その際、選挙の意義について考えさせる。」とある。今後、選挙権年齢が18歳以上に引き下げられることもふまえて、選挙に参加することを通して、政治参加することの重要性を生徒に気づかせることは、重要な課題となってくる。

本校3年生を対象にアンケートを実施し、生徒の政治参加への意欲を調査した。

①「選挙権年齢が20歳から18歳に引き下げられることについて」

「よいことだ」、「よくないことだ」という意見も多かったが、72人中25人が選挙権年齢引き下げについて「どちらとも思わない」と回答した。

②「3年後、有権者となったときに選挙に行くか」

72人中「あまり行こうとは思わない、行きたくない」が12人、「どちらでもよい」が13人。

③「今の政治に興味があるか」

72人中「まったく興味がない」が19人、「どちらでもない」が13人となった。

この結果をみると、生徒の政治への関心は高いとはいえず、また主権者として政治に参加しようとする生徒も多くないことがわかった。そこで、政治的意識、政治参加への意欲が低い生徒に政治参加の必要性を実感させる授業をつくることにした。

2 授業の構想

『社会科 中学生の公民』（以下、教科書）p.98「政治参加のあり方」は、第2部4章「国民として国の政治を考えよう」という単元のまとめにあたる部分である。選挙の問題点や三権のはたらきを学習したうえで、私たちが政治をよりよくするためにどのようにかかわっていくのかを考えさせ、生徒に政治参加の意義を理解させることが本時の核となる。

政治参加の方法のなかで、中学生にとって最もイメージしやすいものは選挙であるが、2014年の衆議院議員選挙では、20歳代の投票率が32.58%と過去最低の低さとなっている。対して60歳代の投票率は68.28%と例年よりも低いものの、2倍以上の差が開いている。実際の投票数にしてみると20歳代は420万票に対し、60歳代は1240万票と実に3倍近くもの差がある（参考：総務省、文部科学省『私たちが拓く日本の未来』）。少子高齢社会において、ただでさえ少ない若者の票は投票率の低下によりさらに少なくなっている。

○本時の流れ

	学習内容	生徒の活動	指導上の留意点・評価
導入	間接民主主義における政治参加のありかた	直接民主主義と間接民主主義の違いについて確認する。 【発問】 「間接民主主義においてどのような政治参加の方法があるか」 予想される答え 選挙・政治家になる・デモ・請願権	○間接民主主義において選挙が最も身近な政治参加の方法であることを生徒に理解させる。
展開	有権者の立場で投票を試みよう 選挙の結果から若者の投票率の低下が招く問題点を考える	1 候補者の主張を理解する。 A：老後の生活に安心を与えよう B：お金のない若者に支援をしよう C：社会保障を充実させるためには増税はしかたない 2 投票用紙を選んだ候補者に投票する。 ◎この際、自分が投票したい候補者がいなければ投票しなくてもよい。 3 今回の有権者のカードは高齢者のものが多かったことを理解し、今回の投票結果と照らし合わせながら、若者が投票をしないとどうなるかを考える。	○生徒には有権者の設定が書かれたカードを配布し、自分の立場からどの候補者がよいかを考えさせる。有権者のカードは高齢者の比率が高まるように枚数を設定しておく。 ○投票用紙は高齢者と若者の色を分けておき、開票時にわかるようにしておく。 ○開票したのち、投票しなかった生徒数を確認する。そのうち有権者の設定が若者だった人数も確認する。
整理	政治参加の必要性を理解する	若者が投票をしないことにより、政治家の政策がより票の集まる高齢者むけになってしまうことに気づき、選挙を通して政治参加することの重要性を理解する。	【評価】18歳から有権者となるため、政治に興味をもち、社会を形成する公民としての自覚をもつことができたか。

教科書p.100には「選挙ゲームをやってみよう」という内容で中学生に選挙を体感させる実践が紹介されている。今回はこの選挙ゲームをベースとして、中学生に政治参加の重要性を実感させる授業を考えた。

今回の授業では、「少子高齢社会において若者の投票率の低下が招く問題点」を生徒に気づかせるため、2点のくふうを加えた。まずは、投票者の年齢などの設定をすることである。ロールプレイの要素を取り入れることで、生徒はどの候補者へ投票するかがより具体的にイメージできる。さらに、その投票者は高齢者が若者よりも多くなるようにした。これにより、クラスの中で少子高齢社会を疑似的につくり出し、投票結果から生徒が考えるきっかけをつくった。

次に、候補者の公約のなかに投票したいも

のがなかったら、無理して投票しなくてもよい（棄権してもよい）こととした。開票後に投票棄権者がこの選挙に与えた影響について考え、若者の投票率の低下が招く問題点に気づかせるためである。

設定は高齢者と若者をイメージしやすいように40歳代の有権者をつくらないようにした。多様な年代がいるという前提をくずさず、20歳代～30歳代と50歳代～60歳代で大きなくくりをつくることで、生徒が自分に与えられた設定の役割を理解しやすいようにした。今回授業を実施したクラスは36人学級で、有権者のカードは20歳代～30歳代のカードを9枚、50歳代～60歳代のカードを27枚とした。これは、棄権者が出なかった場合でも少子高齢化の影響を生徒が感じられるよう、有権者数ではなく、衆議院議員選挙の20歳代の投票数

420万票と60歳代の投票数1240万票の比率をクラスにあてはめたものである。

【有権者の設定】

- 60歳代男性…妻と2人暮らし、お金には余裕がある、老後の生活に少し不安を感じている。
- 50歳代女性…夫と息子夫婦、孫とくらす、お金はあまりない、息子夫婦が面倒をみってくれるので老後の心配はない。
- 30歳代男性…会社員、独身、つとめている会社は労働条件が過酷で転職を考えている、将来の生活に不安がある。
- 20歳代女性…会社員、独身、IT企業につとめ給料はかなりいい、結婚に興味がなく老後に向けて貯金をしている。

候補者A～Cは、高齢者むけに老後の生活への対策や社会保障の充実をかかげたA、Cの候補者、若者のための政策をかかげたB候補者とした。生徒に「候補者A、Cが高齢者の票をうばい合うため候補者Bが有利ではないか」と思わせるためである。しかし、有権者のカードは、実際の有権者の比率よりも若者のカードを少なくしているため、候補者Bに票が集まることはない。これは、開票後に生徒に考えさせた。

また、二つ目のくふうである「無理して投票しなくてもよい」というルールも、生徒に考えさせるきっかけの一つである。本来の授業ならば、選挙に行かなければならないと教えるところだが、本授業では、「選挙に行かなければどうなるのか」を考えさせるため、あえて棄権してもよいというルールをつけた。そして、実際に棄権者が出るように、有権者設定には、「お金に困っていない」、「老後に困っていない」という設定を入れた。候補者A～Cはいずれもお金がなく将来に不安のある人むけの政策をかかげている。そこに注目して、生徒は棄権を選択すると考えた。

3 授業の展開

2クラスで授業を実施した結果、投票結果は次のようになった。

[A組] 34人 (2人欠席)
候補者A：18人
候補者B：7人
候補者C：4人
棄権5人 (うち20歳代～30歳代 1人)

[B組] 36人
候補者A：15人
候補者B：5人
候補者C：5人
棄権11人 (うち20歳代～30歳代 5人)

投票結果をみると、おおむねこちらの意図したとおりとなった。この結果をもとに生徒に考えさせることは次の2点となった。1点目は、なぜ選挙結果がこのようになったのか、2点目は、この結果は次の選挙にどう影響するかである。

1点目について、まずは若者むけの政策に票が集まらないという点に生徒の疑問を向けさせる。なぜ若者むけの政策に票が集まらないのかということを考えさせると、少子高齢化の影響であることに気がつく生徒が数人いた。しかし、少子高齢化とはいえ、若者の多くが投票すればもう少し候補者Bに票が集まるはずである。そこで、棄権者数へと生徒の視点を変えていく。今回は「気に入った候補者がいなければ投票しなくてもよい」としたことで、棄権者が多くなった。B組の棄権者数は予想どおりの結果である。これをもとに、若者が投票しないことによって、選挙結果が大きく左右されることを生徒が理解することができた。棄権者の数は50歳代～60歳代と20歳代～30歳代ではほぼ同数だが、母数が大きく異なるため、若者が捨てた一票は大きい。

[授業前]

自分で責任をもてないから。
よくわからないから。



[授業後]

少子高齢化が進み、さらに若い人の投票数が少ないと、政治が高齢者むけのものになり、また投票数が減るといふ悪循環になることがわかりました。投票するために今から少しずついろんなことに興味をもっていきたいと思いました。

政治に積極的に参加しようと思うかは3年後自分で考えることだから今はわからない。



たださえ若者が少なくなってきたのに、投票率が低いと今後、この国が危ないかなと思いました。だから、自分たちも若者として政治に興味をもって参加するべきだと思いました。


3年後だと、大学受験などがあり、ほかにも忙しいことが多く、そちらを優先したい。




今回の授業を通してぼくは、選挙というのは若者がしっかり興味や関心をもって、積極的に参加して支えていかなければ、高齢者に対する対策しか生まれなくなることがわかりました。ぼくも将来は積極的に選挙に参加していきたいと思いました。

ここから生徒は知識や興味がないからといって簡単に選挙に行かないという選択をしてはいけないということに気づけたようだ。一方のA組は予想と反し、若者の棄権者が少なかった。しかし、若者の棄権者が少ないとしても、若者の母数が少ないため、若者の捨てた一票が大きいことに違いはない。A組の結果でも同様の気づきを得ることができた。

2点目の次の選挙にどう影響するかについては、「もし自分が議員だったら、次の選挙で当選するためにどのように対策を立てますか」という発問をした。この発問では、これまでの投票する立場ではなく、立候補者の立場で若者の棄権者が増えることを考えさせた。生徒は、次回の選挙で当選するためには、政策を高齢者むけにすればいいのではないかという意見にたどりついた。若者が選挙に参加しないことにより、若者にとって政治が遠い存在になってしまう。生徒は、関心がないからといって政治に参加しないことで、もっと政治から遠ざかる可能性があることに気づくことができた。立候補者の立場からも選挙を考える機会をつくることで、生徒の政治参加についての多面的な思考を深めることにつながった。

 4 生徒の反応

「3年後、有権者となったときに選挙に行くか」というアンケートに「あまり行こうとは思わない、行きたくない」、「どちらでもよい」と答えた生徒が授業を通してどのように変化していったか、授業の感想と比較してみると上記のようなものがみられた。生徒にとっては、少子高齢化とあいまって若者の政治離れが大きな影響を及ぼすことが理解できたようだ。

 5 おわりに

授業前には「あまり行こうとは思わない、行きたくない」と答えていた生徒の感想のなかに、「もっと若者が選挙に行けばいいことがわかった。強制にすればみんな来てくれるのでは」という考えをもつ生徒もみられた。『アドバンス中学公民資料』p.64, 65には「投票率を考える」という特設ページが組まれ、投票は義務か権利かを考える実践がのっている。今回の授業からさらに発展させて、投票の義務化の是非を考えさせる授業展開もできる可能性を感じた。